

真実を求めて

私たちは真実が明らかにされることを望んでいるのです。
たとえ時間がかかってもかまわないから、
どうして娘を失わなければならなかったのか知りたいのです。
それがわからなければ、私たちはあの歩道橋の上から一步も進むことができないのです。

あの現場にいなかった人に、私たちの体験した状況を想像することは難しいと思います。
テレビや新聞で報道される映像だけを見ていると、全体的に混雑しているのがよくわかり
ますが、あの現場にいた人々にとっては、全体の状況など見えるはずもなく、
ただ前の人のあとについて進んでいただけなのです。
私たちが、あの歩道橋に入ったのは事故の1時間前でした。
あの歩道橋に入るとき、たしかに混雑はしていましたが、
全く危険を感じることはなかったのです。
遊園地のアトラクションの列に並ぶようなものでした。
警備員から迂回路の案内もなければ、案内板もありませんでした。
たった100メートル程の歩道橋を通行するのに、1時間以上もかかるなんて、
誰が想像できたのでしょうか。
それからの1時間、徐々に混雑が激しくなっていく中、警備員も警察もいなくて
また、前の状況もわからず、何の案内もなく、引き返すこともできず、
避けようのない状況で事故に巻き込まれたのです。
人を車にたとえていうならば、高速道路のトンネル内で渋滞に遭い、進むことも戻るこ
もできない状況で、事故に巻き込まれたようなものでした。
その状況の中で、周りの人々はつとめて冷静でいようとしているかのようでした。
親たちは、必死で子供を守ろうとしていたのです。
戻れコールも、やむにやまれずはじまったのです。祈りの叫びでした。
私は、新奈を必死に守りながら、恐怖で声も出せませんでした。
そして、人の圧力がコンクリートの壁のように迫り新奈と引き離されたのです。
あまりにも巨大な力の前で、人々はあまりにも無力でした。
目の前で子供を見失い助けにもどることもできませんでした。

子供を守れなかった悔しさが、わかりますか？
事故の日より、一日たりと、新奈に謝らなかった日はありません。
あの場所に連れて行かなければ、新奈は死ぬことはなかったのです。
あの日より、私たちは自分自身を責めつづけています。
悲しみ、後悔、自責の念、苦しみ続けています。

私たちは、新奈の死に対して責任を感じています。
しかし、私たちがあの場所に行かなかったら、事故は起こらなかったのでしょうか？
たしかに、私たちは新奈を失うことはなかったでしょう。
しかし、事故は起こっていたと思うのです。
だからこそ、私たちは事故の真実を知りたいのです。
警察や、明石市など、相手があまりにも大きな権力のため、
この事故がうやむやのまま処理されていってしまうのではないかと、不安になります。
警察が警察を調べるなんて、自分で自分を調べるようなものではありませんか。
それを、どこまで信用できるのでしょうか。
明石市や警備会社にしても同じようなものです。
いろいろな人から話を聞けば聞くほど、
何を信じたらいいのかわからなくなるばかりです。
真実を知っている人がいても、相手が警察や市では、後々の自分自身の事を守るため、
口を閉ざしてしまうのではないのでしょうか。
調査にはたいへんな労力を必要とされるでしょうが、
どうか私たちの哀しみをお汲み取りいただき、真実が誰の目にも明らかになりますよう、
厳正な捜査をしていただけます様よろしくお願い致します。

平成14年1月5日
多田 洋子